

能登復興支援ツアーに参加しました

思い立って能登半島復興支援ツアーに参加してきました。能登の震災については、新聞、テレビのニュース程度、しかもすでに扱いはたいへん小さくなっているようにも感じ、ホントのところどうなんだろう？と、東京新聞で紹介されていた元朝日新聞輪島支局にいた藤井満さんの『能登のムラは死なない』（2011-15に取材して歩いた奥能登の村々が、震災後もしぶとくさまざまに過ごしているようすを）を1冊読んで、ネットで見つけた復興支援ツアーに参加しました。



スタートは、珠洲市見附島公園、津波の被害も受けた宝立地区から。震度7の地震の後、津波は3mほどだった言いますが、海辺の宝立地区は被害を受け、さらには2mの地盤沈下、その後の水害もあって、すでに震災から1年以上たっているというのに、まだまだあちこちに崩れたり、壊れたりした建物、渡れない橋、壊れたままの車などが残り、今、解体工事をしているお宅や、すでに解体が終わって更地になっているところも多く見られました。



公園や小中学校の校庭にはさまざまなスタイルの仮設住宅が建てられ、案内をしてくれた篠原さんも仮設住宅にお住まいで、でも学校の避難所暮らしから仮設

住宅に入るまでに6ヶ月かかったとのことでした。

ここ宝立町は、能登半島の富山湾側＝内浦、一方で山越えをした日本海側の外浦では、逆に地盤が4mほども隆起して、漁港のほとんどが使えなくなり、またその後の水害で、大規模な土砂崩れが起こり、海岸線に沿った道路は、そのほとんどが土砂に埋まって、やっと仮設道路がつながっているという状況でした。



正直言って、予想以上の状況で、とにかく来て、見てよかったとも思いました。それで、何ができる、と言うわけでもないのですが…。

その日は、先端の狼煙にある旅館に泊まり、翌日、禄剛崎灯台に行きました。観光地ですが人出はなく、駐車場のある道の駅も休業中でした。一方で、そこから次の日に行った金沢兼六園周辺は、桜の季節でもあり多くの観光客が来ていて、その落差も感じました。

帰りに金沢駅で地元の「北國新聞」（いつも地方紙を買う）を買って開くと、「のと鉄道語り部列車出発」「珠洲蛸島港、震災後初 新造漁船」「被災建物残る町 神輿練る 輪島重蔵神社」と、この日も震災関連の記事が載っていて、ここでも温度差を感じました。

やはり、私は気になったら、行って、見て、話を聞いて… をやっぴこうと。